

日本語の未知漢字語彙の意味推測に見る 中国語を母語とする学習者の推測手がかりの利用 —漢字語彙の日中対応関係及び L2 習熟度の観点から—

崔 媯

要 旨

本研究では、中国語を母語とする日本語学習者 (CJL) の未知漢字語彙の意味推測の実態を解明することを目的に、学習者が意味を推測する際に用いる手がかりを語彙手がかりと文脈手がかりの 2 つに設定し、選択式の意味推測課題を用いて調査を行った。CJL の回答を分析し、漢字語彙の日中対応関係 (語彙カテゴリー) による違いと L2 習熟度による違いという 2 つの観点から検討を行った。その結果、まず、語彙手がかりと文脈手がかりの両方が利用できる場合の推測では、L2 習熟度の高低と関係なく、CJL は 2 つの手がかりを統合して利用することが分かった。また、手がかりが 2 つあるにも関わらず、CJL が語彙手がかりを使わず文脈手がかりのみで意味を理解する様子が観察され、この傾向は、S 語 (日中同形同義語) において特に目立ち、L2 習熟度が低い CJL において顕著であることも示された。

【キーワード】意味推測、手がかり、漢字語彙カテゴリー、L2 習熟度

1. はじめに

第二言語 (以下、L2 とする) において学習者が習得すべき語彙の数は膨大であり、語彙の習得を教室指導のみに委ねるのは、効率的ではない。L2 語彙は、読解や聴解の中で新しい語を理解しながら習得していくことが多いと指摘されている (Paribakht & Wesche, 1999 など)。また、新しい語の意味を知るために、辞書を引く、人に聞く、自分で推測するなどの方法もあるが、読みを中断させず、文章を理解するという読解の本来の目的を達成させるためには、語の意味を推測するという方法が望ましいであろう。谷内 (2012) でも、「特に中級以降では辞書に頼るだけでなく、その語を取り巻く文脈から得られる情報を活用して意味を推測する活動が重要となってくる」と述べられているように読解活動における語彙の意味推測の重要性が指摘されている。

日本語の文章には漢字語彙が多く出現する。日本語は中国語と共通した書字形態を有するため、日本語に関する語彙知識がなくとも、中国語を母語とする日本語学習者 (以下、CJL とする) は中国語の知識で日本語の漢字語彙の意味を類推することがしばしばできる。このため、日本語の漢字語彙の意味理解は、CJL にとって容易であると思われがちである。しかし、日本語の漢字語彙には、日中同義の語

彙が多数存在する一方、日中異義の語彙も少なくない。こういった日中異義の漢字語彙を理解する際、中国語の知識をそのまま援用すると意味理解に失敗すると予想される。CJL にとって既知である漢字語彙を対象語とし、習得や認知処理の観点から行われた実証研究 (加藤, 2005; 小森・玉岡・斎藤・宮岡, 2014 など、2. 先行研究で詳述) では、すべての日本語の漢字語彙が CJL にとって習得・処理しやすいわけではなく、日中対応関係によって CJL の習得や認知処理の容易さにバラつきがあることが明らかにされている。この知見から、未知の漢字語彙に関しても、日中対応関係によって CJL の推測の仕方や推測の結果が異なるという可能性があることが考えられる。

そこで、本稿では、未知漢字語彙の意味推測に際して、CJL はどのように推測手がかりを利用するか、その利用の実態は漢字語彙の日中対応関係または、L2 習熟度によって異なるかについて検討する。学習者が推測に利用する手がかりとして、文章に関する背景知識、語彙に関する知識、文法知識などの情報があると言われている (Paribakht & Wesche, 1999; Nassaji, 2003 など) が、本稿では語彙手がかりと文脈手がかりに注目して議論を進める¹。なお、語彙手がかりとは、語彙にまつわるあらゆる情報

(形態素情報、個々の漢字から得られる日本語の意味・中国語の意味)であり、文脈手がかりとは、語彙を取り巻く前後の文から得られる文法や意味に関する情報であると定義する。

2. 先行研究

2.1 日本語漢字語彙の習得・認知処理に関する研究

2.1.1 漢字語彙の日中対応関係

(以下、語彙カテゴリーとする)

文化庁(1978)の分類によると、日本語の漢字語彙は中国語との対応関係から、①意味が同じか、またはきわめて近い語(Same、以下S語)、②意味が著しく異なる語(Different、以下D語)、③一部重なっているが、ズレがある語(Overlap、以下O語)、④中国語に存在しない語(Nothing、以下N語)という4つの語彙カテゴリーに分けられる。

2.1.2 CJLにおける既知漢字語彙の習得

加藤(2005)は、上述の分類を用いてCJLの漢字語彙習得を検討した研究である。テストとして、語彙カテゴリーが異なる漢字語彙を含んだ日本語の短文が正しいかどうかを判断する正誤判断テストが用いられた。また、習得に母語の影響があるかどうかを検証するために、英語を母語とする日本語学習者(以下、EJLとする)にも同様の調査を実施した。CJLとEJLから得られた結果を比較しつつ、CJLの漢字語彙の習得について語彙カテゴリー別に以下の(1)から(4)のようにまとめている。すなわち、(1)S語はCJLにとって易しく、たとえ未知であっても母語からの正の転移により、推測が可能である、(2)D語は初中級では、負の転移が強いが、L2習熟度が上がるにつれ、習得が進む、(3)O語は多義性により、上級になっても習得していない場合がある、(4)N語には、正の転移が起こりやすい語と転移が起こりにくい語²があると結論付けた。

小森・玉岡・斎藤・宮岡(2014)は、対象語をO語・D語(日中同形語)³、N語に限定し、多肢選択の空所補充形式のテストでCJLに調査を行った。その際、漢字語彙の習得に母語の影響があるかどうかを判断するために、選択肢の作成基準を予め定めた。また、語彙総合テストを用いてCJLの総合的な語彙知識を測定した。2種類のテストの結果を合わせて分析した結果、総合的な語彙知識が増えるにつれ、CJLのN語の習得やO語・D語の日本語の独自義(独自の意味)の習得が進んでいくことが示

された。一方、中国語の独自義は日本語に転移しやすく、総合的な語彙知識が豊富なCJLにも中国語の独自義の転移が見られた。

以上の実証研究は、用いられた手法が異なるものの、結果として、両者に共通して語彙カテゴリーによってCJLの漢字語彙の習得状況が異なることが示唆された。4カテゴリーのうち、S語の習得が比較的容易であり、O語の習得が困難であることに加え、O語についてはL2習熟度によって習得状況が異なっており、L2習熟度の高い学習者にとっても難しいカテゴリーであることが言える。

2.1.3 CJLにおける既知漢字語彙の認知処理

小森・玉岡・近藤(2008)は、日中同形のD語とO語を、CJLがどのように認知処理を行うかについて、文正誤判断テストを用いて検討した。正文と中国語義で解釈すると意味が通る非文をまぜて、パソコン画面で一文ずつ呈示し、CJLにその文が正しいかどうかの判断を求めた。誤答率と反応時間を用いて分析した結果、D語とO語を処理する際、L2習熟度と関係なく、反応時間は長く、誤答率も高いことが分かった。この結果から、同形語を中国語の意味で理解すると文の意味が通る日本語の非文に対して、迅速に、また正確に否定判断をすることはCJLにとって困難であることが示唆された。なぜこのような結果が得られたかについて、小森ほか(2008)は、同形語の認知において日本語義の活性化が迅速ではなく、中国語の心内辞書が優勢に機能していると解釈した。また、加藤(2005)と異なり、L2習熟度による差が見られなかったのは、同形語に関して、認知処理の過程では、中国語義の過剰な転移を抑制することはL2習熟度の高いCJLにとっても困難であるが、実際に使用する段階では、L2習熟度の高い学習者は中国語義を正しく抑制して日本語義を想起できるからであると考察した。

さらに、小森ほか(2008)では中国語独自義があるO2語(中国語の意味範囲が広い語、注4参照)とD語をCJLがどのように処理するかについて比較検討した結果、D語よりO2語のほうが、誤答が有意に多いことが明らかになった。この結果から、小森ほか(2008)は、中国語独自義が日本語に適用できないことを言語接触の中で認識していくことは容易ではないため、処理過程においては中国語の独自義が活性化しやすく、日本語義で処理するのが難しくなったとしている。また、O2語と比べて、D

語は共有義がないため、中国語義による干渉も少ないということも指摘した。

2.2 日本語の未知語の意味推測に関する研究

2.1 で紹介した漢字語彙の習得・認知処理に関する研究は、基本的に既知語を対象としている。ここから紹介する意味推測に関する研究は、対象語が学習者にとって未知であることを前提としている。

日本語漢字語彙の意味推測に関する研究は、最初は、母語に漢字がなく漢字語彙の推測が難しいと予想される EJL を対象とし、行われていた。代表的なものには、Mori & Nagy (1999)、Mori (2002)、Kondo-Brown (2006) がある。Mori & Nagy (1999) では、漢字語彙を、対象語のみ、対象語のところ为空欄になっている文、対象語を含んだ完結した文という3つの条件で提示し、EJL に対象語の意味を英語で作成された4つの選択肢から1つ選ばせた。3つの提示条件での正答率を比較した結果、対象語を含んだ完結した文が提示された条件での正答率が最も高いことが分かった。この結果から、Mori & Nagy (1999) は、意味推測の際、利用できる情報が複数与えられれば、EJL はそれらを組み合わせて利用することができる結論付けた。さらに回答方法として母語による自由記述を用いた Mori (2002) でも、Mori & Nagy (1999) を裏付ける結果が得られた。また、Kondo-Brown (2006) では、漢字語彙を単独で提示、文脈とともに提示という2つの条件で調査を行い、EJL が英語で報告した語彙の意味を分析した。その結果、文脈と音韻から得られる情報が EJL の漢字語彙の意味推測に役立つということが明らかになった。

上述した研究の対象者の母語は英語であり、日本語と書字体系が明らかに異なるため、学習者は推測に母語知識をそのまま用いることができない。日本語の未知語の意味推測について、CJL と韓国語を母語とする日本語学習者（以下、KJL とする）を対象者とし、調査した山方 (2008) では、推測に用いる知識源⁶は母語背景によって異なるということが示唆されている。山方 (2008) によると、KJL の知識源の利用は文法知識との関係がより強いのは対照的に、CJL は語彙知識を活用して意味推測を行うという。CJL が推測に語彙知識を多用する可能性を踏まえて、崔 (印刷中) は Mori & Nagy (1999) の実験デザインに倣い、CJL の未知漢字語彙の推測の実態を明らかにすることを試みた。手法として、選択

式の意味推測テストを作成し、CJL に調査を行い、利用できる手がかりの数の違いによって、CJL の推測の実態に違いがあるかを調べた。その結果を Mori & Nagy (1999) での EJL に見られた傾向と比較して明らかになったこととして、EJL と同様、利用できる手がかりが増えるにつれ、CJL は手がかりを組み合わせて利用すること、語彙手がかりと文脈手がかりの両方が使える条件での正答率が最も高いことから、語彙手がかり以外の情報が利用できる場合、CJL は語彙手がかりのみで推測を行わないことが挙げられる。さらに、CJL には語彙手がかりを利用せず文脈手がかりのみで推測を行う様子も観察された。

一方、これまでの先行研究では、L2 語彙の意味推測に影響を与える要因として、母語の影響だけではなく、L2 習熟度もしばしば取り上げられている。Nation & Coady (1988) は、L2 習熟度の低い学習者は L2 文章を十分に理解できず、文脈から情報を得られないため、語彙そのものに依存して推測を行うしかないという見解を示した。またこれまで行われてきた実証研究でも概して、L2 習熟度が高いほど、未知語を取り巻く文脈や統語情報がよく理解でき、効果的に活用できる。そのため、推測の正答率も L2 習熟度の高い学習者のほうが高いことが報告されている (Mori & Nagy, 1999 ; Kondo-Brown, 2006 ; 山方, 2008 など)。

3. 研究課題

以上の先行研究から、CJL の漢字語彙に対する習得・認知処理の状況は語彙カテゴリーによって異なることが示唆されている。既知語の習得・認知処理と未知語の推測は異なるプロセスを辿ると思われるが、意味を理解することが共通の前提である。したがって、CJL の漢字語彙の意味推測にも、語彙カテゴリーによる違いが見られると考えられる。崔 (印刷中) では、未知漢字語彙の意味推測において、CJL がどのように推測手がかりを利用するかという全体像について考察したものの、語彙カテゴリーによる違いという観点から、詳細に議論していないという課題が残されている。

そこで、本稿では先行研究で示された知見と残された課題を踏まえて、以下の課題を設定する。研究課題：CJL による未知漢字語彙の意味推測は、語彙カテゴリーや L2 習熟度によって異なるか。

4. 研究方法

本調査は、授業時間内に調査紙を用いて実施された。調査紙は主に、L2 習熟度を測るための SPOT テスト (Version2) ⁷ と意味推測テストの 2 つから構成されている⁸。以下では、分析対象者の選定と調査紙のデザインについて詳述する。

4.1 分析対象者

調査には中国の大学の日本語学科に在籍している 2、3 年生計 73 名が参加したが、回収された回答から、(1) ほとんど答えなかった 3 名、(2) 意味推測テストの無回答の出現の外れ値 (平均+2SD 以上) 2 名、(3) 錯乱肢の選択率の外れ値 (平均+2SD 以上) 1 名、(4) SPOT 得点の外れ値 (平均-2SD 以下) 1 名、(5) SPOT 得点の中央値 34 点 5 名、計 12 名のデータを除外し、最終的に 61 名分のデータを分析対象とした。また、SPOT 得点の中央値を用いて 61 名の CJL を上位群、下位群に分け (表 1 参照)、上位群と下位群の得点に差があるかどうかを検証するため、一元配置分散分析を行った。結果、0.1%水準で有意であった [$F(1,59)=199.65, p<.001$]。

表 1. SPOT 得点による群分け

	平均	最大	最小	標準偏差	N
全体	37.30	61.00	12.00	13.56	61
上位	49.27	61.00	37.00	7.18	30
下位	25.71	33.00	12.00	5.79	31

65 点満点

4.2 調査材料：意味推測テスト

意味推測テストは、Mori & Nagy (1999) のデザインを参考にして作成した。テストでは、利用できる情報の種類を操作しながら、対象語を 3 つの条件で提示した (表 2 参照) が、本稿では、本研究の研究課題を検討するために、統合条件で得られた結果のみ分析し、議論を進める⁹。なお、調査においては、同じ語が 1 つの条件にしか出現しないようカウンターバランスを取っている。

表 2. 3 つの提示条件 (「把握」の場合)

語彙条件 (語彙情報のみ)	把握
文脈条件 (文脈情報のみ)	状況を____してから対策を考えましょう。
統合条件 (語彙情報+文脈情報)	状況を 把握 してから対策を考えましょう。

4.2.1 調査対象語

未知語であるかどうかの判断の目安として、調査協力校で使用されているメインテキスト、旧日本語能力試験出題基準 (1 級~4 級) を参考にした。事前に用意した漢字語彙を、テキストと旧日本語能力試験出題基準に照らし合わせ、両者に記載されていない語を対象語とした。しかし、十分な調査対象語の数を確保するため、旧日本語能力試験 1 級の語であるが、予備調査では正答率が低かった語 5 つ (結末、始末、公用、沈没、凶作) も、入れることとした。最終的に調査対象語となったものについては、表 3 に示したとおりであり、各語彙カテゴリー 15 個ずつになっている。

表 3. 調査対象語

S 語	諷刺	款待	回顧	頑強	美化	凝結	在外	細心
D 語	企図	輕率	言外	茫然	排外	把握	着眼	
語	地道	懸念	緣故	作為	快活	看過	漠然	節目
O 語	着想	激動	結束	告訴	打算	發毛	寒心	
N 語	始末	現役	脱落	公用	保守	压榨	新手	外地
語	眼前	平手	吸引	沈没	明朗	惰性	人物	
N 語	荷札	凶作	反骨	新規	好物	漸次	平明	断行
語	受賞	答申	拔本	降板	稼働	專念	想定	

4.2.2 実験文

本調査では、対象語が含まれた文が提示された場合 (表 2 の統合条件)、つまり手がかりとして語彙情報と文脈情報の両方が利用できる条件で、CJL は 2 つの情報を推測手がかりとして利用するか、またどのように利用するかを見ることを目的としている。したがって、文の難易度による結果への影響を排除するため、実験文は、難しい文法を使わずシンプルな構文で作成した。文中に筆者の判断で、調査対象語以外に知らないと思われる語がある場合、その語の直後に日本語読みと中国語訳をつけた。

4.2.3 選択肢

意味推測テストの回答形式は、Mori & Nagy (1999) と同様、学習者の母語で意味が示される多肢選択式である。CJL の手がかりの使用状況が反映されるよう、4 つの選択肢は、予め決められた基準にのっとり、日本語教育を専攻とする中国人民大学 2 人と筆者の 3 人によって作成された。具体的な作成基準、そしてそれぞれの選択肢が CJL によって選ばれた場合、それが何を意味するかという判断基準は、表 4 に示したとおりである。

表 4. 選択肢の作成基準及び判断基準

	作成基準	判断基準
A	対象語の構成要素とある程度合致するが、文脈に合わない	対象語の意味を構成要素から推測した。(語彙手がかりへの依存)
B	文脈と意味的な関連があるが、対象語の構成要素と関係ない	対象語の意味を文脈から推測した。(文脈手がかりへの依存)
C	正答。対象語の構成要素と語彙を取り巻く文脈の両方と合致する	対象語の意味を構成要素と文脈の両方を見て推測した。(語彙手がかりと文脈手がかりの統合)
D	錯乱肢	分析しない

4.2.4 語彙カテゴリー別¹⁰の設問例・作成方法

以下では、語彙カテゴリー別に実験文を提示しながら、各選択肢の作成方法の具体例を示す。また、選択肢 A、B、D については、括弧内に日本語訳を示す。選択肢 C は正答であり、対象語の日本語の対訳であるため、別途日本語訳は示していない。

【S 語の設問例 (対象語：把握)】

実験文：状況を把握してから対策を考えましょう。

A 把守 (守衛する)	構成要素のどれか 1 つを含む語で作成、意味的には誤答になる
B 询问 (問い合わせる)	構成要素を使わず、意味が通るよう文脈に意味的に関連する語で作成
C 把握	対象語を中国語表記で提示
D 奔走 (奔走する)	構成要素と文脈と全く関連しないよう作成

【D 語の設問例 (対象語：激動)】

実験文：彼女は生まれてからの 80 年間、大空襲にあったり、洪水にあったり、息子を亡くしたりして、激動の人生を送ってきました。

A 激動 (興奮する)	対象語を中国語表記で提示
B 悲惨 (みじめ)	構成要素を使わず、意味が通るよう文脈に意味的に関連する語で作成
C 动荡	構成要素から連想できる、かつ実験文の文脈にも意味的に合致する語で作成
D 豪华 (豪華)	構成要素と文脈と全く関連しないよう作成

【O 語の設問例 (対象語：吸引)】

実験文：スリムな体を作るために、脂肪吸引という手術を受ける若い女性が増えています。

A 吸引 (引き付ける)	対象語を中国語表記で提示
B 分解 (分解する)	構成要素を使わず、意味が通るよう文脈に意味的に関連する語で作成

C 抽出	構成要素から連想できる、かつ実験文の文脈にも意味的に合致する語で作成
D 举行 (開催する)	構成要素と文脈と全く関連しないよう作成

【N 語の設問例 (対象語：漸次)】

実験文：台風が漸次東北に進んでいくため、気象庁はその辺の住民に警戒を呼びかけています。

A 次次 (毎回)	構成要素のどれか 1 つを含む語で作成、意味的には誤答になる
B 慢慢 (ゆっくりと)	構成要素を使わず、意味が通るよう文脈に意味的に関連する語で作成
C 渐渐	構成要素から連想できる、かつ実験文の文脈にも意味的に合致する語で作成
D 细细 (ほそぼそと)	構成要素と文脈と全く関連しないよう作成

ここでは、A、B、C、D の順で実例を挙げているが、実際の調査紙では、選択肢を入れ替えて順不同で提示している。また、日中の漢字語彙には、形式が同じであるが、品詞が異なるものが存在することから¹¹、CJL が品詞の違いで回答してしまうことが懸念される。それを防ぐために、選択肢間の品詞、日本語の対象語と中国語の選択肢の品詞を統一した。

5. 結果

本研究では、CJL の異なる手がかり使用を示す各選択肢の選択率 (表 5)¹² を分析の指標とした。

表 5 の記述統計の結果を見ると、選択率の平均に関しては、全体的な結果でも、上位群、下位群別の結果でも、正答の選択肢 C の選択率が最も高いことが分かる。また、誤答と設定された選択肢 A と B も選ばれているが、A の選択率は低いのに対して、B の選択率は、やや高めになっている。さらに語彙カテゴリー別に詳細に見ると、選択肢 A の選択率に関しては、カテゴリー間の大差がない。一方、選択肢 B の選択率に関しては、全体の平均を高い順に並べると、S 語、D 語、N 語、O 語になり、選択肢 C の選択率に関しては、全体の平均を高い順に並べると、O 語、N 語、D 語、S 語になる。このように語と語の間で選択率が異なることが分かる。また、表 5 の結果から、選択肢 B と C の選択率に関しては、S 語と O 語の間の差が大きいということが言える。上位群の結果と下位群の結果を比較すると、S 語と O 語の間の差は下位群において顕著である。

表 5. 語彙カテゴリー別に見る各選択肢の選択率の平均値及び標準偏差

選択肢	カテゴリー	S語		D語		O語		N語	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
A 語彙手がかりへの依存	全体	3.28	9.70	2.30	7.33	2.95	7.96	1.97	6.97
	上位群	2.67	6.80	2.67	6.80	2.67	6.80	0.67	3.59
	下位群	3.87	11.83	1.94	7.80	3.23	8.94	3.23	8.94
B 文脈手がかりへの依存	全体	30.49	26.02	21.64	16.71	17.38	15.14	19.67	18.64
	上位群	24.00	22.15	18.67	17.07	15.33	14.31	14.00	14.74
	下位群	36.77	27.87	24.52	15.83	19.35	15.64	25.16	20.30
C 手がかりの統合	全体	65.90	27.18	75.74	18.15	79.34	17.36	78.03	20.71
	上位群	72.67	23.37	78.67	17.84	82.00	16.61	84.67	16.07
	下位群	59.35	28.95	72.90	18.00	76.77	17.67	71.61	22.59

単位：%

CJL の意味推測（推測手がかりの利用）に、語彙カテゴリーと L2 習熟度による影響が見られるかどうかを統計的に検討するために、選択肢 A について、4×2 の二要因分散分析を行った。独立変数は、語彙カテゴリー要因（S 語、D 語、O 語、N 語の 4 水準）と L2 習熟度要因（上位群、下位群の 2 水準）で、従属変数は、選択肢 A の選択率である。続いて、選択肢 B と C についても同様に、4×2 の二要因分散分析を行った。

まず、選択肢 A に関して、分散分析の結果、カテゴリー要因の主効果 $[F(2.45,144.76) = .40, n.s.]$ ¹³ と L2 習熟度要因の主効果 $[F(1,59) = .49, n.s.]$ については有意な差が検出されず、交互作用も見られなかった $[F(2.45,144.76) = .51, n.s.]$ 。

次に、選択肢 B に関して、分散分析の結果、カテゴリー要因の主効果 $[F(2.47,145.84) = 5.64, p < .01]$ 、L2 習熟度要因の主効果 $[F(1,59) = 9.90, p < .01]$ が有意であったが、交互作用は有意ではなかった $[F(2.47,145.84) = .76, n.s.]$ 。カテゴリー要因のいずれの間に差があるかを確認するため、多重比較を行った。その結果、S 語と O 語の間の差のみ有意であった（S 語 > O 語）。

最後に、選択肢 C に関して、分散分析を行った結果、カテゴリー要因の主効果 $[F(2.60,153.48) = 5.52, p < .01]$ 、L2 習熟度要因の主効果 $[F(1,59) = 9.94, p < .01]$ が有意であったが、交互作用は有意ではなかった $[F(2.60,153.48) = .74, n.s.]$ 。カテゴリー要因のいずれの間に差があるかを確認するため、多重比較を行ったところ、S 語と O 語の間の差のみ有意であった（S 語 < O 語）。

以上の結果より、未知漢字語彙の意味推測では、

L2 習熟度と関係なく CJL は基本的に語彙手がかりと文脈手がかりを組み合わせて利用していることが示された。そして、文脈手がかりのみで推測を行うことも観察され、この傾向は、S 語において特に目立ち、L2 習熟度が低い CJL において顕著であることも示された。

6. 考察

以下では、CJL による未知漢字語彙の意味推測がなぜ語彙カテゴリーや L2 習熟度によって異なりが見られたかについて、5.結果を踏まえながら、CJL の推測手がかりの利用状況、具体的には、語彙手がかりへの依存、文脈手がかりへの依存、語彙手がかりと文脈手がかりの統合について検討する。

6.1 語彙手がかりへの依存

4.2.3 で述べたように、選択肢 A は、語彙手がかりのみ利用して推測を行う基準で作成されている。表 5 で A の選択率の平均を見ると、4%を超えない（最大値：下位群の S 語、3.87%）ことが分かる。また、選択肢 B と C の選択率の平均と比較すると、A の選択率の平均がきわめて低いことも明らかである。この結果から、CJL は語彙手がかりに依存しない、つまり、語彙そのものから得られる情報だけで推測を行わないと言える。また、統計の結果、選択肢 A の選択率に関しては、カテゴリー間においても、上位群と下位群の間においても、有意な差が見られなかったことから、語彙カテゴリーや L2 習熟度と関係なく、CJL は語彙手がかりに依存しないという結論が導かれるだろう。

では、なぜ CJL には語彙手がかりへの依存が見られなかったのだろうか。言語距離が言語学習に与え

る影響について Swan (1997) は、言語距離に近い言語は同根語を有する場合があります、これは学習者の L2 理解に利便性を与えると述べた。一方、混乱を引き起こす紛らわしい同根語が存在していることも指摘している。例として、イタリア語の *attuale* (英訳: *current, topical*) が挙げられた。*attuale* という語はロシア語母語話者、フランス語母語話者、デンマーク語母語話者にとって理解しやすい(それぞれの言語での対応語は *aktual, actuel, aktuel*、意味がほぼ同じである)が、英語母語話者にとっては混乱を引き起こす同根語 (*confusing false cognate*) になるという。この現象は Laufer (1990) で挙げられた偽の透明性 (*deceptive transparency*) にあたると考えられる。Laufer (1990) では、語の形態は新しい語の識別を容易にするが、偽の透明性という形態による難しさも存在する。偽の透明性によって学習者は、その語をなじみのある形態として識別し、語の意味理解に失敗してしまうという説明がなされている。L1 と L2 が同根語関係にある場合、L2 には偽の透明性を持った語があり、L1 と形態が類似していても意味が異なる可能性があるという知識は、教室指導や読解活動を通じて得られる。そして、読解活動で偽の透明性による意味理解の失敗を回避するため、学習者は語を取り巻く前後の文脈を参照する必要がある。

本研究の調査で提示された選択肢 A は、対象語の構成要素の 1 つを必ず含むように作成されているため、偽の透明性を持った意味であると言える。選択肢 A の選択率が最も低いことから、CJL は語彙手がかりに依存せず、文脈から得られる情報に照合しながら、推測を行ったと言える。その推測過程に、日中同形でも意味が異なる可能性があるという認識が働きかけたことも考えられる。

また、L2 習熟度の低い CJL には、先行研究で報告された文脈が読めず語彙そのものに依存して意味を理解する様子が見られなかった。この点については、本研究の実験文に難しい文法が含まれていなかったため、CJL は文脈手がかりを利用でき、語彙だけに頼らなくて良かったという理由が考えられる。

6.2 文脈手がかりへの依存

文脈手がかりのみ利用して推測を行う基準で設定された選択肢 B の選択率に関しては、統計の結果、S 語と O 語の間 (S 語 > O 語)、上位群と下位群の間 (下位群 > 上位群) に選択率の差が有意であった。

この結果から、CJL には、文脈手がかりに依存して S 語の意味を推測する傾向があると言える。また、この傾向は上位群と比べて、下位群のほうが特に目立つことも分かる。

では、なぜ推測に利用できる情報が、語彙と文脈の 2 つあるにも関わらず、CJL は文脈のみに頼ったのだろうか。要因の 1 つが読解過程にあると考えられる。村岡 (1999) によると、文章理解の過程には、ボトムアップ処理とトップダウン処理という 2 つの処理過程が含まれている。そして、Huckin & Coady (1999) は、読解の中で、個々の語の意味を知らなくても文章が理解できる場合、学習者は語の形式に注意を向けなくなるという可能性を指摘している。この 2 点を踏まえて考えると、今回の意味推測テストには理解が難しい文型や文法が使用されていないため、CJL は文の理解に際して対象語の S 語を見ず、自分の経験や背景知識に基づき、ほかのことばを埋め合わせ、トップダウン処理を活性化させたという可能性が考えられる。

もう 1 つの要因として、CJL の漢字語彙に対する認識が推測の結果に影響を与えたことも考えられる。今回の調査の最後¹⁴には、日本語の漢字語彙を見たとき、すぐに中国語と同じだと思うかという課題が設けられている。CJL の回答を集計したところ、26%の CJL が「いいえ」と答え、48%の CJL は「時による」と答えた。さらに、「時による」と回答した CJL の一部からは、文脈を見てから意味を考えたいという詳しい追加説明もあった。このことから、意味推測にあたって、CJL は文脈を重視し、意味を文脈と照合したがるという慎重に推測していることが窺える。

また、6.1 でも述べたように偽の透明性の存在により、S 語を見て、あえて日中同義であると思わないようにすることも推察される。実際に見られた事例は、以下のとおりである (対象語: 排外)。

【実験文】共生社会を作るために排外主義を無くすべきだと考えています。

A、排除 B、利己 C、排外

この推測問題において、選択肢 B の選択率は 40%を超え、高い水準となっている。漢字からも分かるように、選択肢 B の中国語は、対象語と少しも重なっておらず、意味もまったく関連していない。

さらに、同じ S 語の事例であるが、日中同義だと思わないほか、中国語での共起関係に基づき、対象語の意味を選択したと考えられる例（対象語：頑強）も見られた。

【実験文】市民は政府の増税計画に**頑強**に抵抗しました。

A、自强 B、坚决（きっぱり） C、頑強

この推測問題において、不正解の B の選択率は 89%以上もあり、つまりほぼ全員が対象語「頑強」の意味を「きっぱり」であると理解したことが示されている。中国語で共起関係を考えて、「坚决」と「抵抗」の組み合わせは、「頑強」と「抵抗」の組み合わせより想起されやすく、使用頻度も高いように思われる。しかし、推測の際、対象語の構成要素に目を向けていれば、構成要素とまったく関係のない選択肢 B は選ばなくなる。この誤答例も、CJL の文脈手がかりへの依存を証明する一例である。

最後に、S 語の意味推測に関して、文脈への依存が下位群に強く見られた理由は、先行研究とは異なり、L2 習熟度による違いではないと考える。なぜなら本研究では、実験文を下位群にとっても分かりやすい文にしたため、文脈の理解度に両群の差はないと仮定できるからである。S 語の意味推測について、なぜ上位群と下位群とで使用する手がかりがやや異なったか、推測にあたって、CJL は何を考慮し手がかりを選択していたか、これらの点を解明するために、今後、CJL にインタビューする必要があると思われる。

6.3 手がかりの統合

手がかりの統合を意味する選択肢 C の選択率が最も高いことから、崔（印刷中）と同様、語彙と文脈の両方が与えられた条件での推測においては、CJL はその両方を合わせて利用するという結論が導かれる。この結果は、EJL の意味推測を見た Mori & Nagy (1999) と一致している。本研究では、CJL には、山方 (2008) で示唆された語彙知識を多用することが見られず、EJL と同様、手がかりを統合している様子が観察された。

さらに、統計の結果、選択肢 C の選択率に関しては、S 語と O 語の間 (O 語 > S 語)、上位群と下位群の間 (上位群 > 下位群) に選択率の差が有意であったことから、手がかりを統合しない傾向は S

語と下位群で顕著にあらわれると言えよう。

6.2 で述べたように、一部の S 語に関して、CJL は文脈に依存して推測を行うため、意味理解に失敗する確率が高くなっている。一方、O 語に関しては CJL は語彙手がかりと文脈手がかりを利用して推測を行うため、正答率が比較的高い。CJL の習得を見た研究 (加藤, 2005 ; 小森ほか, 2014) や認知処理を見た研究 (小森ほか, 2008) では、母語から正の転移を受けられる S 語が習得・処理しやすいカテゴリーであるとされており、母語の独自義を抑えることが困難な O 語が習得・処理にくいカテゴリーであるとされている。本研究では習得・認知処理の研究と反対の結果が見られたことから、CJL は、既知語の意味理解と未知語の意味理解とは、異なるプロセスを辿る可能性が高いと考えられる。CJL は既知語の意味理解には、母語知識を積極的に活用するが、未知語の意味理解には、母語からの影響をあえて避けようとしている可能性があることが推測される。

具体的には、S 語に関して、既知語の場合、習得済みであるため、日中同形同義であるという知識をすでに持っており、新しい文脈で遭遇しても、同形同義という認識が活性化されるため、正しく意味を理解することが可能である。しかし、反対に未知語の場合、偽の透明性により、初めて遭遇したとき、日中同義であると考えをあえて避ける可能性がある。これによって文脈に依存して推測を行うようになると推測される。

一方、O 語の正答率が高いことから、文脈の効果が見られたということも言える。O 語は、中国語にも存在する語であり、意味範囲が日本語と異なるカテゴリーである。O 語を単独で見ると、その意味を特定することが困難である。しかし、文脈と合わせた形で提示されると、語そのものからだけでなく、文脈からも有益な情報が得られるため、手がかりを統合することで正確な意味にたどり着くことが容易になる。

しかしながら、同じ日中同形の未知語であるにも関わらず、一部の S 語の推測に際しては語彙手がかりを無視するが、O 語の推測に際しては、手がかりを統合するという違いが見られた。なぜこのような違いが生じたかという点については、今後の課題とし、インタビューなどの手法を用いて解明したい。

7. まとめ

本研究は、選択式の意味推測テストを用いて調査を行い、CJLの未知漢字語彙に対する意味推測の実態を手がかりの使用という側面から明らかにすることを試みた。崔（印刷中）で残された課題を取り上げ、調査の結果を、語彙カテゴリーとL2習熟度の2つの観点からより詳細に分析を行った結果、崔（印刷中）と同様、利用できる手がかりが複数ある場合、CJLは手がかりを統合して意味推測を行うことが明らかになった。また、CJLには、一部の語彙については語彙手がかりを使わない、つまり、語彙の構成要素に注意を向けず文脈のみで意味を理解するという傾向があることも示唆された。これは、S語において、L2習熟度が低いCJLにおいて特に顕著であった。さらに、本研究で得られた結果を習得・認知処理に関する研究で得られた結果と比較したところ、意味理解について未知語か既知語かによってCJLがたどるプロセスが異なることも示唆された。

本研究の結果を踏まえて、今後CJLを対象に、漢字語彙の意味推測についてストラテジー指導を行う際、正確に意味を理解させるために、文脈情報に照合することは大事であるが、文脈と共に語彙の構成要素にも注意を向けるように注意喚起をする必要があると思われる。文化庁（1978）によると、日中同形の漢字語彙のうち、S語は約3分の2を占め、数が最も多いカテゴリーである。この点についてもCJLに明示したほうが良いことが示唆される。

本研究では、同じ日中同形であってもS語かO語によってCJLが用いた推測の手がかりが異なるという結果が得られた。なぜこのような違いが生じたかを明らかにするために、今後、調査方法を改善し、さらなる研究を行う必要がある。

注

1. 研究方法の章で述べるように、本研究はMori & Nagy (1999)を参考に調査をデザインしている。Mori & Nagy (1999)では、手がかりを語彙手がかりと文脈手がかりの2つにし、手がかりの利用状況が分かるように選択肢の作成をコントロールしている。
2. 加藤（2005）によると、正の転移が起りやすいN語とは、中国語の知識で意味が推測しやすい語であり、転移が起りにくい語とは、推測が困難な語である。
3. 小森ほか（2014）では、対象語となるO語とD語のそれぞれの数が少ないため、O語とD語をまぜて日中同形語とし、分析や考察を行っている。

4. 小森ほか（2008）では、日中に共有義があるO語を、日本語独自義があるO1語、中国語独自義があるO2語、日本語と中国語にそれぞれ独自義があるO3語の3つに分け、議論を進めている。
5. Kondo-Brown（2006）では、音韻情報の利用に関しては、学習者が対象語をどれだけ正しく読めるかという音韻アクセスで判断している。
6. 山方（2008）で用いられている知識源という用語は、本稿で言う手がかりに相当すると考える。
7. SPOTは、筑波大学留学生センターによって開発された日本語能力を測定する簡易テストである。詳細については、小林・フォード丹羽・山元（1996）を参照されたい。
8. 普通の漢字語彙学習に対する考え方や漢字語彙の推測に関するポリーフ調査も同調査紙に含まれているが、本稿ではそれらの結果について、詳しくは論じない。
9. 提示条件による推測結果の違いについて議論した研究は、崔（印刷中）を参照されたい。
10. 対象語を4つの語彙カテゴリーに分類する際には、現代中国語の語義で分類作業を行った。古代中国語の語義を考慮しないこととした。
11. たとえば「緊張」（中国語表記：紧张）という語彙は、日本語では名詞、スル動詞であるが、中国語では形容詞である。
12. 選択肢Dも一部のCJLに選ばれているため、選択肢A、B、Cの総和は100%にならない。また、選択肢Dの選択率は分析指標にならないため、表5には示していない。
13. 統計処理の結果、Mauchlyの球面性検定で有意確率が5%を下回っているため、球面性の仮定が成り立たなかった。F値について、ここではGreenhouse-Geisserのイプシロンを利用して自由度を修正した結果を採用した。本研究で提示されているF値に小数が二桁あるものはすべてこれと同様、自由度を修正したものである。
14. この数字は、普通の漢字語彙学習に対する考え方のアンケート（注8参照）から得た結果の集計である。

謝辞

調査にご協力くださった学生の皆さまと先生方、本研究に対して多くの助言をくださったお茶の水女子大学の西川朋美先生、査読者の方々にご心より感謝申し上げます。

参考文献

- 加藤稔人（2005）「中国語母語話者による日本語の漢語習得—他言語話者との習得過程の違い—」『日本語教育』(125), 96-105.
- 小林典子・フォード丹羽順子・山元啓史（1996）「日本語能力の新しい測定法「SPOT」」『日本語教育論集 世界の日本語教育』(69), 201-218.
- 小森和子・玉岡賀津雄・近藤安月子（2008）「中国語を第一言語とする日本語学習者の同形語の認知処理—同形類義語と同形異義語を対象に—」『日本語科学』

- (23), 81-94.
- 小森和子・玉岡賀津雄・斉藤信浩・宮岡弥生 (2014) 「第二言語として日本語を学ぶ中国語話者の日本語の漢字語の習得に関する考察」『中国語話者のための日本語教育研究』(5), 1-16.
- 崔娉 (印刷中) 「中国語を母語とする日本語学習者における未知漢字語彙の意味推測」『第二言語としての日本語の習得研究』(18)
- 文化庁 (1978) 『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局
- 村岡英裕 (1996) 「読解ストラテジー研究—読解能力の習得との関わりから—」宮崎里司・J.V.ネウストプニー(編)『日本語教育と日本語学習—学習ストラテジー論に向けて—』くろしお出版, 17-132.
- 谷内美智子 (2012) 「後項動詞の種類からみた日本語学習者の統語的複合動詞の意味推測の特徴—文脈量と日本語習熟度の影響を中心に—」『言語文化と日本語教育』(44), 1-10.
- 山方純子 (2008) 「日本語学習者のテキスト理解における未知語の意味推測—L2 知識と母語背景が及ぼす影響—」『日本語教育』(139), 42-51.
- Huckin, T. & Coady, J. (1999). Incidental vocabulary acquisition in a second language. *Studies in Second Language Acquisition*, 21, 181-193.
- Kondo-Brown, K. (2006). How do English L1 learners of advanced Japanese infer unknown Kanji words in authentic texts. *Language Learning*, 56, 109-153.
- Laufer, B. (1990). Why are some words more difficult than others? Some intralexical factors that affect the learning of words. *IRAL-International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 28(4), 293-308.
- Mori, Y. (2002). Individual differences in the integration of information from context and word parts in interpreting unknown kanji words. *Applied Psycholinguistics*, 23, 375-397.
- Mori, Y. & Nagy, W. E. (1999). Integration of information from context and word elements in interpreting novel kanji compounds. *Reading Research Quarterly*, 34, 80-101.
- Nassaji, H. (2003). L2 vocabulary learning from context: Strategies and their relationship with success in L2 lexical inferencing. *TESOL Quarterly*, 37(4), 645-670.
- Nation, P. & Coady, J. (1988). Vocabulary and reading, In R. Carter, and M. McCarthy (Eds.), *Vocabulary and Language learning*. New York: Longman, 97-110.
- Paribakht, T. S. & Wesche, M. (1999). Reading and “Incidental” L2 vocabulary acquisition: An introspective study of lexical inferencing. *Studies in Second Language Acquisition*, 21, 195-224.
- Swan, M. (1997). The influence of the mother tongue on second language vocabulary acquisition and use. In Schmitt, N, and M. McCarthy (Eds.), *Vocabulary: Description, Acquisition and Pedagogy*. Cambridge: Cambridge University Press, 156-180.

さい へい／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
ivy114609@yahoo.co.jp

Usage of Inferring Clues by Chinese Learners of Japanese when Encountering Unknown Japanese Kanji-words —From the Viewpoint of Correspondence Relationship between Japanese and Chinese, L2 Proficiency—

CUI Ping

Abstract

In this study, in order to clarify how Chinese learners of Japanese (CJL) infer unknown kanji-words, an inferring test with four choices was used. Four choices were designed to show how CJL use inferring clues and the usage of word clues and the usage of context clues were tested. The answers of CJL have been analyzed from the viewpoint of correspondence relationship between Japanese and Chinese, L2 proficiency. The result showed that, regardless of L2 proficiency, when both word clues and context clues are available, CJL tend to integrate clues. A conspicuous tendency to infer without using word clues has been observed in some synonym words and CJL of low L2 proficiency.

【Keywords】 mean inferring, clues, the category of kanji-words, L2 proficiency

(Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University)